

国語

(分析は一般入試Aの問題のみです)

出題傾向

※第二問は現代文または古文のどちらか選択

入試日程	大問	問題文筆者・書名(出典)	難易度
2/3	第一問	坪井秀人『二十世紀の日本語詩を思い出す』	やや難
	第二問 【古文】	『今昔物語集』	標準
	第二問 【現代文】	カロリン・エムケ、浅井晶子訳『なぜならそれは言葉にできるから』	標準
2/4	第一問	江原由美子「フェミニズム批評と家族」『社会学評論』	やや難
	第二問 【古文】	『和歌庭訓』	やや難
	第二問 【現代文】	森田真生『計算する生命』	標準
2/5	第一問	川添愛『ヒトの言葉 機械の言葉 「人工知能と話す」以前の言語学』	標準
	第二問 【古文】	『夜の鶴』	やや難
	第二問 【現代文】	前田健太郎『女性のいない民主主義』	標準

●出題形式

現代文、古文ともに長文総合問題である。第一問現代文が必須で、第二問は現代文か古文のどちらかを選択して解答する。

●出題範囲と出題内容

a. 出題範囲

現代文は近代以降の文章、古文は近世以前の文章である。漢文は出題されていない。

b. 出題内容

【現代文】

2022年度は、ほとんどの問題が評論文の出題であった。ジャンルは、歴史認識、フェミニズム論、数学、AIと言語・知性、政治学に関する文章。2月3日の第二問だけは随筆であるが、翻訳文で、暴力と言葉の関係を語る深い内容のもの。多彩なジャンルからの出題といえる。文章の抽象度、設問の難度ともに高い出題が多かった。

【古文】

2021年度の出典が平安期の日記、歌物語、作り物語であったのに対し、2022年度は、平安期の説話集と鎌倉期の歌論であった。文章量は、約950～1050字程度で昨年度よりやや減。昨年度はストーリーのある文章ばかりであったが、今年度は登場人物のいない文章、それも歌論が二回出題された。普段読み慣れている文章とは違い、てこずったのではないだろうか。

●問題の傾向と解答形式

【現代文】

設問は、漢字、語句の意味、接続詞・副詞や語句の空欄補充、傍線部の内容説明または理由説明、その他内容理解に関する問題、趣旨合致などで、入試の定番である。設問数は第一問で10～12問(マーク数13～16)、第二問で9～12問(マーク数10～17)。出題形式はすべてマークシート方式(原則として五者択一)である。

第一問の文章量は約3160字～6100字程度で、ばらつきがある。設問内容は漢字の書き取り、語句の知識を問う問題、空欄補充問題(接続詞・副詞・語句)、内容理解に関する問題、問題文の趣旨などである。第二問の文章量は約2840～4730字程度。設問内容は、漢字問題が少ないだけで、第一問と比べてあまり違いはない。

中には、本文に書いてあることと同じようなことが書かれてある選択肢を選ぶのではなく、たとえ本文の中に、そのものにずばり対応する箇所がなくても、本文理解のうえに立って、この選択肢が妥当だと判断しなければならないような高度な出題もあった。

【古文】

設問数は9～12問(マーク数12～15)で、昨年度より減少している。設問内容は、単純な語義の問題は比較的少な

- く、文法、文学史といった知識問題と、解釈、内容説明など読解力を問う問題である。具体的な傾向は以下の通り。
- ・解釈の問題は、単なる傍線部の直訳ではなく、前後の内容を踏まえて判断しなければならないことが多い。
 - ・内容説明問題も、単に傍線部を訳していれば解答が見えてくるというものではなく、傍線部を訳したうえで、前後の文脈の中でどういうことを意味しているのかを判断しなければならず、やや高度である。
 - ・文法問題は、品詞分解、活用、語の識別、助動詞の意味という出題であった。
 - ・2021年度には、省略されている主体・客体を問う問題が多かったが、2022年度は（物語文の出題が少なかったので）、そのような問題はなかった。
 - ・文学史の問題は、2022年度は二日程での出題だったが、相当細かい内容で、難問であった。
- 総じて、幅広い知識と、文脈を正確に読み取る力、選択肢を丁寧に吟味することを要求する問題である。解答形式はすべてマークシート方式（原則五者択一）である。

●難易度

【現代文】

2022年度は抽象度が高い文章や高度な選択肢の出題もあり、総じてやや難と言えよう。

【古文】

2022年度も昨年度に引き続きやや難である。

国語

(分析は一般入試Aの問題のみです)

学習対策

【現代文】

●筆者のイタイコトをつかまえよう

評論の筆者は自分の意見（イタイコト）を読者に伝えるために文章を書く。しかし、それをそのままぶつけても誰も納得してくれない。そこで、論拠を挙げ論理的に説明を加えて自分の意見に説得力を持たせようとする。入試現代文は、その筆者のイタイコト、論の展開を受験生がしっかり把握できたかどうかを調べるために設問の設定を行っている。よって、問題を解く際は、まずこの文章では何がテーマ（話題）になっているのかをつかまえ、接続詞や強調語などを道しるべに、筆者の論の展開を正確にたどり、最終的にこの文章のイタイコトはこれなのだとして把握するようにしよう。そのためには、普段から新書レベルの読書を心掛け、ただ漫然と読むのではなく、各章・各節で上記のことを意識するとよい。問題集に取り組む際も同様である。

●幅広く国語の知識を身につけよう

梶山女学園大学では、第一問・第二問を通して漢字や語句など、知識を問う設問も出題されている。漢字の問題集や国語知識の問題集に取り組み、評論でよく使われるような語句などをマスターするとよい。また普段の生活や読書を通して、知らない言葉や事項に出会ったら、こまめに辞書や国語便覧を調べるなどして語彙力や知識を身につけるよう心掛けよう。漢字の問題集に取り組む時も同様である。また文学史が出題されることがあるので、問題集や国語便覧を通して、著名な文学者とその作品名、主義、流派などを覚えておこう。

●マークシート方式問題に慣れよう

大学入学共通テスト対策問題集やマークシート方式の私大対策問題集に取り組もう。ただ闇雲に読んで何となくピンときた選択肢を選ぶのではいけない。繰り返しになるが、その文章のテーマが何で、どういう論理展開がされ、どのような結論（イタイコト）を導いているのかを把握したうえで、設問に取り組むこと。マークシート方式の問題集は上記のことが押さえられていれば選択肢を1つに絞れるように作られている。解答に迷った時には、選択肢をじっくり見て考えこむのではなく、設問が何を問っているかを考えたうえで、本文に立ち返り、本文と選択肢、選択肢相互の異同を照合して判断するようにすること。また全体の設問量が多いので、過去問に取り組んで、時間配分の練習をしておくとうい。

●ややレベルの高い読書を

現代文ではかなり抽象度の高い、やや難解な文章が出題され、選択肢もしっかり本文を理解していないと選べないような出題がある。普段からややレベルの高い新書の読書をするとうい。

【古文】

●基礎知識の充実をはかろう

古文の問題も、単語や文法、文学史などの基礎知識を問う問題が多い。また、解釈問題はかなり意識した選択肢が正解となるものも多いが、まずは文法や単語知識で選択肢を絞り、その後に本文内容と照らし合わせて確認すれば正答できるであろう。ベースは基礎知識である。

古語については400～500語程度を単語帳などでマスターすること。重要古語のほとんどは多義語であり、複数の訳し方ができるようにしよう。その語の語源・語感を理解したうえで訳し方の幅を押さえ、例文の中でふさわしい訳語を選ぶ練習をすることがポイントである。

文法は用言の活用を基礎として、助動詞の接続・活用・意味・訳し方、助詞の意味・訳し方、敬語の種類・用法を押さえておくこと。「なむ（なん）」「らむ（らん）」「なり」「ぬ」「に」「る・れ」など頻出の識別問題にも慣れておきたい。文学史、古典常識についても地道な努力をしよう。今年度の出題から考えて、文学史はやや細かいことまで押さえておく方がよさそうである。

●一人で文章を読み解くことに慣れよう

上記の基礎知識を身につけつつ、私大対策の問題集等を通し、実際の問題の中で知識を使って解く練習をしよう。問題文の中で学習した単語に出会い、その文脈での意味を考えたり、傍線部の中にある重要古語、助詞・助動詞、敬語に着目して選択肢を絞ったり、あるいは解けなかった問題、間違えた箇所に含まれる単語や文法事項をもう一度辞書や文法書に立ち返って確認したりする中で、基礎知識の定着をはかろう。また、問題集で出会った作品について国語便覧を使って文学史的な面を調べる、設問に出てきた文学史事項や古典常識について学習するなど、関連事項も覚える学習をするとうい。

●作品として味わおう

解釈の問題、内容理解の問題では深い読解力を要求するものもある。問題集で文章を読む際、単に語学的な分析（単に現代語に置き換え訳す）のレベルでとどまるのではなく、その文章の中でストーリーがどのように動いているのか、この箇所ではどのような事柄が起こっているのか、この部分で登場人物がどんな心理状態にあるのかを読み取るように心掛けよう。また、セリフについても、ここでその登場人物はどのような意図でそんなことを言うのか、なぜこんな発言をするのかまでも考えて、作品を味わい、深い読解力を身につける努力をしてほしい。